

ら貧困対策に重点を置いたものへ移行しつつあることを示唆している。これらの指摘のもととなる検証が本書で十分になされているとは言い難い。とはいえ、食糧自給が重要な政策課題とならないタイにおいて、工業化社会の農業のあり方は先達のない課題である。本書はこの課題の重要性を改めて認識させてくれる。

(河野泰之・東南ア研)

Helen Creese. *Pārthāyaṇa: The Journeying of Pārtha, an Eighteenth-century Balinese Kakawin*. Leiden: KITLV Press, 1998, 504p.

本書は、副題が示すように、18世紀にバリで作られたカカウィン作品 *Pārthāyaṇa* (PY) の古ジャワ語本文の校訂に英訳と解説を付したものである。

カカウィンは、インド文化の影響のもとに古ジャワ語で書かれた叙事詩で、散文のパルワと並ぶ古典ジャワ語文学の主要ジャンルである。原則としてインド叙事詩から主題を取り、サンスクリット美文詩に倣った韻律規則と比喩表現を駆使した修辞技巧をもつ。書写には南インド系の文字を使用して貝葉に記録された。9世紀中頃に中ジャワで成立したとされる *Rāmāyaṇa* (RY) を嚆矢として、東ジャワでは15世紀まで創作が続き、15編以上の作品が現存している。

このようにカカウィンはインド化された東南アジア文化の代表であり、そのなかでも最も古く長い文学的伝統の一つであるが、これに劣らず重要ながしばしば見逃されてきたことは、カカウィンの伝統におけるバリの重要性である。すなわち、ジャワで作られたカカウィンの貝葉写本の多くがイスラーム化したジャワでは失われたにもかかわらず、バリにおいて筆写され、保存されてきたということ、そして、バリにおいて古ジャワ語の知識が継承され、新たなカカウィンが作られてきたということである。

PY のテキストは、これまで15世紀末ないし16世紀初めにジャワで作られたと考えられてきたが、クリースの研究によって、18世紀にバリで作られた作品であること、しかも、PY と称するテキストには18世紀初めと18世紀末に作られた二つのテキストがあり、これまでPYとして知られていたテキス

トは後者であることが明らかにされた。両者を区別するために、前者をPY、後者を、バリで使われていた通称に従って、*Subhadrāwīwāha* (「スバドラーの結婚」SW) と呼ぶことをクリースは提案している。PYの著者は不明であるが、テキスト中に言及される庇護者の名がクルンクン王朝の第2代王に比定されたことによって、テキストの成立は1730年から36年の間と推定されている。SWは、PYのテキストを別の著者が書き直した改訂版である。

バリで作成されたカカウィンの研究は、日本人によるものも含め、すでになされているが、校訂とその英訳が出版されたのは本書が初めてである。古ジャワ語文学の伝統におけるバリの重要性を明らかにしたという点で、本書の刊行がもつ意義はきわめて大きい。クリースは古ジャワ語文献学の第一人者スボモのもとで研鑽した研究者であり、周到な校訂、翻訳、綿密な注釈に、研究者に便宜を与える解題、補遺、索引を備えた本書は、オランダ流古ジャワ語文献学の系譜を継いだ堅実な業績と評価できる。

本書の原題は「パールタの遍歴」を意味する。パールタは叙事詩『マハーバーラタ』の主要登場人物アルジュナの別名であり、PYの主題は叙事詩第1編にあるアルジュナの巡礼の旅という短いエピソードから取られている。この第1編は10世紀にパルワ作品 *Ādiparwa* (Adp) として古ジャワ語に翻案されており、PYの作者はサンスクリット原典ではなくAdpを素材にして、598頌におよぶ独立した作品を作り上げた。

パーンドワ兄弟の三男アルジュナは、やむを得ない事情で他の兄弟との約束を破った償いのために12年間の巡礼の旅に出る。その過程で、彼は、蛇王の娘やマユーラ王国の王女と契り、呪いで鰐に変身させられた天女たちを救う。その後、クリシュナの妹スバドラー（ジャワではスンバドラで知られる）との恋に落ちたアルジュナは、クリシュナの示唆に従って、クシャトリヤにもっともふさわしい略奪婚によってスバドラーを得る。このような物語の筋はAdp中のエピソードをほぼ忠実になぞるものである。

クリースによれば、PYの作者は明らかにAdpを参照している。さらに、PYやSWの言語、韻律、修

辞技巧は、9世紀中頃の中ジャワで作られた規範的カカウィンRYからほとんど逸脱しておらず、カカウィンの伝統はその始まりから1000年近くの時間を経た後もバリにおいて息づいていたことがわかる。しかし、この場合、バリ人にとってのカカウィンの伝統は、もはやインド世界を志向するものではなく、マジャパヒトによって体现され、18世紀にはすでに失われたヒンドゥー・ジャワ世界を志向するものであったと考えるべきであろう。

しかし、その一方で、クリースは、Adpの中からアルジュナの浪漫的遍歴という短いエピソードをバリ人が繰り返し取り上げている理由として、バリ独自の韻文ジャンルであるキドゥン文学の影響を指摘

している。キドゥンにおいて人気があるパンジ物語では色好みの遍歴する英雄パンジが主人公なのである。

現在、クリースはバリのカカウィン作品などに見られる女性像の分析を進めているところであり、本書に代表される文献学的研究に基づいた歴史社会学的研究の深まりが期待される。東南アジアの前近代の社会像を再構築する際に外来者の記録に頼ることが多い中で、カカウィンというジャンル固有のクリシェがあるとはいえ、バリ人自身の作品の中から当時の社会像を読みとる努力は貴重である。

(青山 亨・鹿児島大学多島圏研究センター)